

地理学視点の福岡：都市圏成長の背景：福岡地理学会設立75周年記念出版

阿部, 康久
九州大学大学院比較社会文化研究院：准教授

磯, 望
西南学院大学：名誉教授

芳賀, 博文
九州産業大学経済学部：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7388878>

出版情報：pp. -235, 2024-11-20. 有限会社 花書院
バージョン：
権利関係：



コラム2

博多と福岡

芳 賀 博 文

はじめに

博多と福岡はよく混同される。福岡市とは別に「博多市」がある（あった）と考えている人も少なくないが、歴史上そんな市が存在したことは一度もない。一般に河川などを境として併存する二つの街は「双子都市」と呼ばれており、江戸時代に那珂川を挟んで対峙した博多と福岡も典型的な双子都市であった。本稿ではこの地域が辿った軌跡を二つの街から概観する。

1. 商都「博多」の繁栄

博多湾岸地域一帯は古来より「博多」と称され、その地理的位置と内湾を有する地形とにより外交や貿易など、日本のゲートウェイとして1000年以上に渡って栄えてきた。博多の地政学的有用性が古くから重視されていたことは、奈良時代以前に九州統括拠点として内陸部に「大宰府」、対外迎賓館として沿岸部に「鴻臚館」が設置されたことから窺える。さらに天智天皇による百済救援の大陸派兵に際しては最重要な兵站基地となり、白村江での敗戦後は大陸からの報復に備えて長大な「水城」が築かれてもいる。平安時代に入ると遣唐使が廃止されたものの、大陸から貿易商人が頻繁に来航し、博多は日宋貿易の中心地となる。特に平清盛が「袖の湊」を築港し、宋船で賑わう市街には唐人街が形成されている。同時に博多は外国からの侵略を度々経験するが、最大のものは鎌倉時代の「元寇」であった。最初の文永の役で市街は焼き払われ多大な被害を受ける。続く弘安の役では博多湾沿岸に約20kmの元寇防塁を築いて侵攻軍の上陸を阻んだ。元寇後に鎌倉幕府は大宰府に代わる西国の防衛拠点として「鎮西探題」を博多に設置する。室町幕府も鎮西探題に代わり「九州探題」を置き、引き続き博多を九州の統治拠点とした。その後、日明貿易で博多は再び国際貿易港・自治都市として泉州の

堺と並ぶ繁栄を極めたが、戦国期には周辺大名による戦火でほぼ壊滅状態に陥る。焦土となった博多を復興させたのは豊臣秀吉であり、この時の街並みが現在の博多地区の基盤となった。さらに九州平定後に筑前領主となった小早川隆景が、北東部の山城「立花城」から沿岸部の「名島城」へ居城を移したことで、政治的な機能も近隣地に付与された。

2. 城下町「福岡」の登場

関ヶ原の戦い後に豊前中津から筑前に入った黒田氏は、52万石の大藩に相応しい巨大な城郭と城下町を博多の西隣にあった福崎丘陵に建設し、当地を黒田氏の故地である備前国邑久郡福岡村にちなみ「福岡」と改名した。この時より、江戸時代を通して城下町「福岡」（福岡部）と町人町「博多」（博多部）とが、那珂川を挟んで対峙することとなる。那珂川で物理的に隔てられた両都市は一本の橋で結ばれていたが、福岡側の橋口には巨大な枳形門が聳え、河岸には約700mに渡り高さ10mほどの石垣が積まれて博多部を威圧していた。尤も、当時の賑わいの中心は博多部の「六町筋」という東西方向の目抜き通りであった。黒田氏は福岡城北側の唐津街道沿いに博多部を真似て東西に「六町筋」を造成し、旧領の中津から従った商人や職人を居住させている。福岡部の六町筋は江戸の日本橋を手本に、福岡藩が威信をかけて博多部に負けない街づくりが行われた（柳 1996）。福岡部六町筋の中心は「呉服町」と名づけられたが、これも博多六町筋の同名町の模倣である。福岡藩は博多部の呉服商人を強制的に移転させたり、呉服商以外でも福岡部では自由な商売を許可したりするなど、なりふり構わず城下福岡の街の振興に力を入れた。しかしながら、こうした藩による様々な枳入れにもかかわらず、江戸時代を通じて居住人口・運上銀（営業税）ともに福岡部が博多部を上回ることにはなかった（武野 2000）。鎖国で貿易が長崎のみに限定されたことで国際貿易都市としての賑わいは影を潜め、博多は福岡藩の商人町としての内需路線で生き延びていくこととなる¹⁾。以後、福岡藩は黒田氏の治世下で改易や減封・移封等の処分を受けることなく継続し、博多と福岡も微妙な関係を保ちながら明治維新を迎える。

1) 江戸時代の博多では工芸品の生産も盛んとなり、博多織や博多人形などの名品が福岡藩から幕府へ献上されていた。

3. 福博の融合

1888年の市町村制の公布により、翌1889年に当地は福岡区（旧福岡部）と博多区（旧博多部）が合併する。当然ながら新市の名称を巡り大いに揉めた。紛糾の末、市名を「福岡」、国鉄（当時は九州鉄道）の駅名を「博多」とすることで一旦決着するが、これに不満を持つ博多側議員は翌1890年に市名を「博多市」へ変更する議案を提出。博多は人口・経済力とも福岡を凌駕し議員数も多かったため、採決で当然「博多市」になるはずだったが、何故か投票結果は賛否が同数、最終的に福岡側出身の議長の裁決で否決となって「福岡市」が確定した。ただし市名は福岡となったものの、その発展の基礎は博多が作り出したと言ってよいだろう。特に博多の呉服商だった渡辺與八郎は、帝国大学を福岡に誘致する際に大きな功績を残したほか、外部資本に対抗する地元資本の「博多電気軌道」を発足させ、自身の所有地を無償提供して開通させた（偉業を称え本人没後に「渡辺通り」と命名）。また、明治から昭和前半まで商業の中心は博多六町筋を引き継いだ博多地区であったが、福岡側の九州鉄道（現在の西鉄）ターミナル駅に、関西の阪急を手本とした百貨店「岩田屋」が開業する。その前身の岩田屋呉服店も名だたる博多の老舗であった。さらには原田平五郎を筆頭とした博多商人を中心に、闇市とは一線を画す「新天町商店街」が戦後の1946年に創業している。その後も博多の商店街の店舗の多くが天神地区に出店し、商業機能は2000年代初めまで福岡側の天神地区へ一極集中する様相を呈していった。

むすび

福岡市は博多と福岡という性格の異なる双子都市を母体とし、両者の長所をいかに発揮して九州経済圏における卓抜的な中核都市となるに至った。福岡市は現在「アジアのビジネス交流拠点」をも標榜しているが、長らくアジアに開かれていた国際貿易都市「博多」の雄志が、今でも継承されているといって過言ではあるまい。

付記 本稿は芳賀（2010）を要略したものである。

参考文献

武野要子（2000）：『博多：町人が育てた国際都市』岩波書店.

芳賀博文（2010）：双子都市から二極都心へ：博多と福岡の共存的発展史, 『都市地理学』 5, 57-65.

柳 猛直（1996）：『福岡歴史探訪 中央区編』海鳥社.